



ピクタインダオン

(おきみがりにぼし)

第 37 号

発行日 2022年8月10日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

花花

あたたかな昼下がり
庭にたたずんでいるわたしに
だれかが呼びかけてくる
姉のような声で

わたしを呼んだのは
鮮やかな花花
やさしい風の手が
笑みを育てている

大きく花卉をひらいた
赤いぼんぼりに蟻が入りこみ
光をまとい夢心地

四月の花花よ
やわらかな光の雨を浴び
まどかな春を謳歌すべし

穴

ごらんなさい

ドーナツ

ストロー

ペットボトル

マンホール

の
穴

見えない？

もつとよく

ごらんなさい

鼻孔

耳穴

排水口

の

まるい穴

見えないの？

海

宇宙

靈魂

の

とてつもなく

深い景色

が

君は言った

まるい穴の背後には

それぞれの世界が存在する
と

哲学者のように

理性的な声で

一つの輪から
生まれる

形而上的な景色
超自然的な現象

親指と

人差し指でつくる

円環から

生まれる

悠久の世界

を
の
ぞ
く



詩の道

詩の道は

きびしい上り坂

時折

立ち止まっては

詩の匂いに

腰かける

すると

遠くから

木々のあいだから

かすかな

すがたは見えない

声

が

ふくらむ

耳をそばだてる
と

潜んでいた

詩の声が……

受けとめて！

すかさず掴まえ
のぞき込む

と

生命力にあふれ

精神の高さで

かがやいている

ふり返る

と

輪郭を失った

冷めたことば

枯れたことば

無意味なことば

が

しかばねとなって

転がっていた

方途もつかない

複雑な闇で

いりくんでいる

詩の道

を

前

へ

這

う

蓮の讃歌

夏の明け方

蓮の海はしいーんとして

水面から高く伸びた葉群の間から

薄紅色の帽子をかぶった蕾が

安らかな寝顔をのぞかせている

薄明かりのなか

お堀の蕾は目を覚まし

風と水のささやきに応えて

少しずつ

笑みをたたえはじめた

十時ころ

水面に陽光がみなぎると

薄紅色の海は

明るく清らかになり

深く心を澄ますと

聞こえてくるのは

蓮の讃歌

昼には

ゆっくりと花を閉じていく

約束

花のいのちは四日ほど

千秋の地に夕闇がふると

ライトで照らしたされた

光の花がいのちを明滅させ

淡く浮かびあがる

灯りが消えると

蓮は黒の影にとけこみ

しずかに眠りに沈んでいく

母

母の字のなかに

乳首のような

小さな点が

ふたつ

年が近い

姉と私は

よく

小高い丘を取りあつた

あたたかく

やわらかい

丘は

いつも

良い匂いがした

いつしか

ふたつの丘は

末っ子の私のもになった

あれから

七十年

母の丘は

昔のままに

おだやかな

日なたの匂い

まあるく

ふかふかの触感を

いまでも

私の指は

覚えている

徒然のエチュード 34

①

四月

久しぶりに

太平川の土手を散歩した

ふと

川端に目をやると

草の上に

白鳥がいる

頭上には

桜

なんとも

ミスマツチな風景

以前みた

白鳥に違いない
が

何ともはや

白鳥とは言いがたい

首

胸

腹

に

だいぶ贅肉がついて

まるで

わたしのよう

羽が折れて

シベリアへ

帰れずじまいの

白鳥は

いつしか

ゆるゆるの体に

②

【某スーパーにて】

A

広告の品は売り切れたんですか？
何にもないんですけど……

すみませ〜ん

昨日

わたし休みだったので
発注していません！

B

鯖の押し寿司が
見当たらない

若い男性の

店員に聞いたら

うちで手作りしてるので

間に合わないんです！

えっ

もうすぐ十一時なのに……

③

空に小鳥がいなくなった日
深きより

ひたすらに

青をあおぐ

花のもとにて春

詩集名を並べたら

詩ができちゃった〜

④

へ楽しんできてね

柔らかい声に

うれしさが込み上げてくる

へ忘れ物ない？

駅前のロータリーで

いつもの娘の口癖

♪ 行つてきまゝす

娘の車を見送り

いざ駅へ

あ！

サンダル履きのままだ!!

絶句

車は行つてしまった

電車の発車時刻まで時間がない

電話をかけると

意外に早く車は引き返してきた

急いでズックに履きかえる

と

娘がにやけた顔で

へタクシーの運転手さん

笑っているよ

運転手さんに

一部始終を見られていた！

(°◇°)
ガーン

へ今度こそ忘れ物ないよね
気をつけて行ってらっしゃい



【ご案内】

第十一回 「ピッタの会」 現代詩勉強会

講師に吉田慶子氏をお迎えし、左記の通り勉強会を開催いたします。演題は、「詩と笑い」です。質問コーナーを設ける予定です。ご参加をお待ちしております。

日時 九月三日（土）

時間 午後一時～三時半 参加無料

場所 あきた文学資料館

申込 参加希望者は、八月二十七日（土）までに、

矢代レイにご連絡ください。

なお、資料準備のため、必ずお申し込みください。

☎ 090 - 1935 - 1180

【あとがき】

今年も栗の花が咲いた。花は一斉に咲き、長く垂れ下がり、犬の尻尾のよう。花色は藤田嗣治の乳白色。

栗の花を見ると母を思い出す。入梅時になると母はよく言っていた。〈栗の花は墜栗花と呼ばれて、梅雨を知らせる花なんだよ〉と。

意識しなくても目に入る栗の花。やがて、花は黄ばみ、色もくすんで、地面にぼたぼたと落ちるようになる。梅雨の季節となるという。

どくだみは母の面影ふくらます（母の句）

